

小さな一歩から繋がる未来

丸亀直斗/兵庫県・名谷ポレポレ F

両親の「子どもには英語で苦勞させたくない」という素朴な願いから、5歳の時にヒッポに参加して34年。今までずっと家族でヒッポを楽しんでいるお父さんメンバーのヒッポ人生。『まいにち多言語 Vol.9』巻頭ページに要約版でお届けした文章の元原稿を全文でお届けします。



ヒッポとの出会いは5歳の時

「学生の時に英語に苦勞したから、子どもには英語くらい話せるようになってほしい」そんな素朴な親の願いから、私がヒッポファミリークラブの多言語活動に参加したのは5歳の時でした。

ヒッポでは週に1回メンバーで集まる会をファミリーと呼んでいます。ファミリーにはシニアから赤ちゃんまでの幅広い層の人々が集まります。そこでは多言語マテリアルの音源を使って踊ったりゲームをしたり、マテリアルのフレーズの真似をしたりします。当時5歳の子どもにとってヒッポは友だちに会って楽しく遊ぶ場所であり、塾や習い事のようなお勉強するところだと思ったことは一度もありませんでした。いつしか我が家にも多言語が聞こえてくるのが当たり前になり、時折ホームステイの受け入れをして、いろいろな国のゲストが自分の家にやってきて一緒に生活することも生活の一部となっていくのでした。

小5で韓国、中2でアメリカにホームステイ

ヒッポには小学生から高校生までの青少年を対象にしたホームステイのプログラムがあり、私は小学校5年生で韓国ソウルに2週間、中学2年生でアメリカのカンザス州に1か月ホームステイに一人で行ってかけました。

私の韓国ホームステイは、我が家に家族でホームステイに来てくれた李さんの家にステイさせてもらいました。国こそ韓国でしたが、親戚の家に遊びに行くような気持ちで韓国へ飛び立って行きました。滞在中はロッテワールドやソウルタワーなど、いろいろなところに連れて行ってもらい楽しく過ごしました。いまでも覚えているのは、



私がおなかを壊した時にホストオンマ(お母さん)が優しくおなかを摩ってくれたことです。

アメリカのカンザスは穀倉地帯に位置し、トウモロコシと州花であるヒマワリが一面に広がる景色が印象的でした。ホストのジョーダンとは一緒にプールに通い、お腹を空かせて家に帰ったらバターを

たっぷり付けたトウモロコシを頬張ったことが懐かしいです。



大人でも一人で海外旅行に行くなんて怖いと思ってしまう人は多いのではないのでしょうか。怖いという感情はどこから来ていると思いますか？海外では何が起こるかわからない「知らない」から怖いのだと

思います。ではなぜ、ヒッポの子どもたちは海外に一人で飛び立ててしまうのでしょうか？青少年の帰国報告会を聞く機会があり、学年が1つ2つ上のメンバーから楽しかったことも辛かったことも体験談として共有してもらいます。体験談を聞いたうえで行きたいかな？ホストファミリーと仲良くなるためにはどうしたらいいかな？困ったときはどうしたらいいかな？と考えることで準備が始まります。10代でありながら、海外に自分が出かけるということに当事者意識が芽生えるのです。そんな中、私も1年間の高校留学プログラムを終えた帰国生が、ステージに立ち英語で帰国報告してくれるキラキラした姿にあこがれた一人でした。

ヒッポの高校留学で再びアメリカへ

私は高校2年2003年の夏から1年間交換留学生として、アメリカのワシントン州の家庭にステイさせてもらいました。家族はホストの Trevor と両親、祖父母の5人家族。そして犬、猫、鳥、熱帯魚と亀が一匹。ホストファミリーの家に到着したのは7月29日、ホストの誕生日。準備されたケーキには”Happy Birthday Trevor, Welcome Naoto”とデコレーションされ、とても素敵な出会いでした。



最初は英語に苦労したけれど Trevor や家族や学校の友人から、彼らが話している言葉を少しずつもらって自分のものにしていきました。学校では数学、合唱、アメリカ史、スペイン語、アメリカ文学などを受講しました。数学の授業ではいい点がとれても、アメリカ文学は宿題が何かもわからない。山あり谷ありの学校生活でした。合唱の授業の一環として、タキシードを着てコンサートに参加したこと、



卒業式で国歌斉唱したことが思い出深いです。部活は Trevor と一緒に水球部に参加し、最初は深すぎるプールで溺れそうになりながら練習しました。キャッチボールが下手すぎて、コーチには”Mr. Butter finger”と命名されました。

滞在中の一番の思い出はクリスマスです。大きなもみの生木がリビングに置かれ、家族の歴史を感じさせるオーナメントで飾られていました。その年には“2003 Naoto”と書かれた雪だるまのオーナメントが新しく作られ、家族の歴史に加えてもらえたことはとても幸せでした。そして、クリスマスの朝には人生で一番多くの山盛りのプレゼントをもらったことは忘れられません。

人生を大きく動かすきっかけ、中国語との出会い

帰国後は、2005 年には地元である岐阜県長良川で世界ボート選手権大会が開催され、高校生ながら通訳ボランティアとして参加し、オランダ代表選手たちとひと夏を一緒に過ごしました。



また、英語を使う機会を求めて地元の国際交流協会での日本語教師ボランティアに参加しました。担当したのは技能実習生として来日した中国人女性の申さんという方でした。英語との紐づきはなかったのですが、この出会いが私の人生をまた大きく動かすきっかけになるのです。申さんは日本語の学習に非常に熱心で、年下の私を先生として慕ってくれたこともあり、私も熱意にこたえる形で彼女が滞在していた 3 年間毎週日曜日に教室へ通いました。教室には中国人実習生が多く、教室の中は中国語で溢れていました。自然と私の興味は中国語にも向けられていきました。進学に際し、大学で学んだことは 3 つありました。英語を維持し、伸ばすこと。中国語を学ぶこと。そして、日本語教師について学ぶことでした。幸いにその 3 つを叶えることができる大学に進学できることになるのです。

英語か？中国語か？

大学入学と同時に始まった中国語学習、それは驚きの体験の連続でした。なんと、1 年目の授業のほとんどは知っていることだったのです。でも、なぜ私は知っていたのでしょうか？それは多言語マテリアルの中に中国語があり、昔から無意識に聞いていたからでした。ヒッポではことばの自然習得をテーマに活動しており、自然の順番を大切にしています。授業を通していままで溜まっていた音が単語とし



て切れ込み、文字に変換されていくこの過程は面白い体験でした。また、当然ではあるものの日本語に未だに息づく中国語を見つけることも学びを更に面白いものにしてくれました。

しかし、1年目の末に専攻選択という名の危機が私を襲いました。専攻する言語を1つにしろというのです。アメリカ留学したのに英語を専攻しないのか？こんなに面白い中国語をやめろというのか？専攻決定の日まで思い悩む日が続きました。頭では中国語を専攻として勉強したいという考えがありました。しかし、気持ちの整理がついていませんでした。中国語ゼミと書いた申請用紙が、ステンレスのポストの底に当たる無機質な音が私の心に突き刺さりました。この瞬間私は英語を捨ててしまったんだと強く後悔しました。この専攻選択の話ヒッポのとあるお父さんメンバーに相談したことがありました。偶然にもそのお父さんメンバーは私と似たようなことを経験したことのある人でした。英語と中国語を対立させる必要はない。どちらも君にとって大切なことばであるということをお話してくれ、やっと気持ちの整理がついたのでした。思い返せば、専攻という言葉で視野が狭くなっていただけで、一番近くにあったヒッポの多言語活動が私の悩みに対する答えでした。

大学の交換留学で中国へ

かくして専攻選択で吹っ切れた私は、中国への交換留学試験に挑戦することに決めたのでした。本来であれば、留学はもっと思い悩むものでしょう。高校生の時の私のように。しかし、国も言語も違うけれど留学は2回目なのです。私に怖いものはありませんでした。幸い私は試験に合格し、2度目の留学先として中国は北京へ向かうことになったのです。

中国でやりたかったことは3つありました。中国語の上級試験に合格すること。北京オリンピックのボランティアに参加すること。帰国した申さんと再会すること。北京でのクラスメイトは、半数は韓国人、その他はタイ、ベトナム、アメリカ、イタリアと多国籍なクラスでした。中国語を学びに中国に来たのに、韓国語の方がよく聞こえてくるという面白い空間でした。試験については同じ目標を掲げる韓国人のクラスメイトと仲良くなり、自習室で夜まで勉強しました。試験については、~~帰~~帰国後に無事合格することができました。北京オリンピックボランティアは、日本人学生会の伝手で、日本選手や関係者が集うJAPAN HOUSEという施設で、受付業務を担当させてもらいました。

申さんとの再会は、長期休暇に実家である山東省日照まで北京から片道10時間かけて夜行列車で向か



いました。当時の中国にはスマホは普及しておらず、時刻表検索もできない時代だったので必死で車内放送を聞きました。再会した日には、申さんが話す中国語が聞き取れるようになったことが嬉しくて涙しました。申さんは帰国後、これから技能実習生として日本へ向かう人を対象に日本語教師をしていました。まさに藍は青より出でて藍より青しでした。また、彼女の結婚式にも招待していただき、数年後には小学生になった息子を連れて日本へ会いに来てくれるなど交友が続いています。

就職 2 年目で訪れた中国駐在のチャンス

就職を考えた際、日本と世界を繋ぐ世界の懸け橋になれる仕事として、物流業界のとある企業に就職しました。簡単に言えば、モノの旅行会社です。世界中にモノを届けたいという人のお手伝いをしています。就職して 2 年目のある日に事件が起こります。その名もスタンプラリー事件。新人社員として社内で伝票を回覧していた私は、とある部長の席にて話しかけられます。「名前は？出身は？大学は？専攻は？」仕舞には、中国語で「中国に行きたいか？」と問われます。「機会があれば」と中国語で返事してしまった私は、翌朝中国は上海へ赴任を言い渡されるのでした。後から分かった話ですが、中国語人材を丁度探していたとのことで、私は掘り出し物だったようです。本来であれば、社内で経験と実績を積んだ中堅社員以上に海外駐在のチャンスが巡ってくるものですが、私は中国語が話せるというだけで入社 2 年目にしてその機会を手にするのでした。

着任後は、中国人しかいない倉庫に日本人 1 人での日々が始まりました。仕事で使う言葉は専門的すぎるので、学生時代に学んできた教科書には載っていませんでした。はじめは何と伝えたらよいのだろうかと思うこともあったけれど、彼らと一緒に仕事しながら、彼らが使っている言葉をそのまま覚えて中国語の物流用語も身につきました。

中国在任中に一番記憶に残っているのは、香港人のお客さんの一言です。深圳に応援出張していた時のことです。深圳は香港に隣接する都市で、言語的には広東語が話されているエリアです。その日会議室に集まったのは、日本人、中国人、香港人。香港人のお客さんの第一声は、「今日は何語で会議しますか？」会議は共通言語を見つけるところから始まったのです。日本語、英語、中国語、広東語、その 4 つを話せるのはその人だけだったのです。その日集まった人に合わせて言葉を切り替えられる人を目の当たりにしたことは、私にとっては衝撃的でした。そして、その日からその人は私にとって憧れの存在です。



舞台はミャンマーへ

中国駐在も 4 年目を迎えていたころ、また事件が起こります。「お前をミャンマーに推薦しようと思う。」この一言で私のミャンマー赴任が決まるのでした。正直に言うと、ミャンマーがどこにあるのかも、何語を話すのかも知らない状態でした。しかし、不思議と不安はありませんでした。仕事ではあるけれど、きっと何とかなるだろう。目の前の人とどのように関わるのかという点では、どこの国に赴任しようとか関係ないのです。

2015 年当時ミャンマーは「アジア最後のフロンティア」と称され、日本政府も含め日本企業の中ではミャンマーブームの時期でした。当時の首都ヤンゴンの外れには草原を工業団地にするプロジェクトがあり、その工業団地に進出する企業の 1 つに私は赴任しました。世界各国から企業を誘致しており、目の前にマレーシア企業、少し先には中国企業、インド企業、アメリカ企業と国際色豊かなエリアでした。元中国駐在員の私は嬉々として中国企業と台湾企業を訪れます。ミャンマーで中国語を話す日本人に出会うという強烈なインパクトで気に入られてお仕事を頂き、プライベートでは中国語カラオケを楽しむまでの仲となりました。私のミャンマーでの仕事は、場所は変わってもモノを運ぶことに変わりはありません。この工業団地すべての企業に携わることができたわけではないけれど、建設資材を輸入して工場が建設されるところから、製品ができ輸出されるところまでお手伝いをさせていただきました。

仕事というと目の前の仕事に盲目的に取り組みがちですが、進出企業の輸出入業務を支える形で工業団地での雇用の創出と技術移転に寄与し、進出企業が 1 社ずつ増えることで少しずつ工業団地らしくなっていく様を間近で目にし、この地域の発展を肌で感じながら仕事をできたことは非常に有意義なものであったと感じています。ミャンマーのとある携帯会社のスローガンに「Moving Myanmar Forward」というものがあります。当時のミャンマーの発展を感じさせてくれるものとして、私が気に入っていたものです。

コロナ禍と子どもの出産を機に日本へ帰国し、4 年ほど国内業務に従事しました。その後、また国際物流の部署に異動し、いまはサウジアラビアから樹脂原料を欧州、アフリカ、アジア、東南アジア、南米、文字通り世界中に輸出する船の手配をしています。私は社内でも、ちょっと変わった経歴の持ち主となっています。



以上、両親の英語くらい話せるようになってほしいがサウジアラビアに繋がってしまうお話でした。

結婚して子どもが生まれても変わらないヒッポの環境

そんな私もヒッポに入ってから34年、いまでは妻と3人の子どもたちとヒッポの活動に参加しています。家族としての活動として、いろいろな国の人のホームステイの受け入れを行ってきました。

その中で今回お伝えしたいのは2023年から2024年にかけて、イタリアの女子高生ステラを1年間受け入れたことです。ステラは漫画の翻訳家を目指す女の子で



た。勉強好きで教科書的な日本語を話すステラでしたが、地元の高校に通うようになり、段々と女子高生らしい話し口調になっていく様子を私たち夫婦で微笑ましく見守りました。また、最初は子どもが苦手だと言っていたステラでしたが、当時4歳と2歳の子どもたちに絵本を読んでもくれるなど、ぐっと距離を縮めてくれました。

子どもたちはイタリアの国旗を見つける度に、ステラの住んでいるところと言うようになりました。ステラが帰国した翌年2025年9月に発生したカムチャッカ地震の時には、海外でも報道されたようでステラも安否確認の連絡をくれました。「私たちのことを気にかけてくれてありがとう」という私のメッセージに、「当然です。私の大好きな日本の家族ですから」と返事をくれたのです。帰国して尚、私たち家族を自分の家族であると呼んでくれることは、私たち家族にとって、とても幸せなことです。

家族5人でアメリカ高校留学のホスト家族宅に里帰り



またアメリカ留学の話に戻りますが、実は高校留学した年から20年以上現在に至るまで、私がどこの国に居ようと欠かさずアメリカのホスト家族とクリスマスプレゼント交換をしています。そして、毎年のようにクリスマスと一緒に過ごしましょうと誘ってくれるのです。そして、2024年年末から家族5人で里帰りすることにしましたのです。家に辿り着いた時にはアメリカ

の両親がハグで出迎えてくれ、私が最後に里帰りしたのは大学を卒業した年だったので、実に14年ぶりの涙の再会でした。



部屋には私が高校留学時の写真が飾られ、クリスマスツリーには“2003 Naoto”の雪だるまのオーナメントが飾られているのを見せてくれました。私にとって高校留学は人生を変えるほどのきっかけを与えてくれた1年でしたが、アメリカの家族にとっても私と過ごした1年を思い出として大切にしてくれていると思えた瞬間でした。また、アメリカの両親に私の子どもたちには何と呼ばせたらいいか？と聞くと、グランマ、グランパと呼んでくれていいと孫として受け入れてくれました。そして、その年のクリスマスには私たち5人の名前入りオーナメントを準備してくれ、家族の歴史に私たちも加えてくれました。私が高校時代を過ごした同じ家で子どもたちが駆け回って遊び、グランマにワッフルを朝食に焼いてもらい、生後10か月の息子はグランパの大きなお腹の上でお昼寝をする。私にとってとても感慨深い滞在となりました。



アメリカから帰ってからはしばらくしたころ、真ん中の娘はまたアメリカに行きたいと言い出しました。理由を尋ねると、グランマのワッフルを食べたいからだという。ワッフルのためにアメリカに行きたいというのは困ってしまうが、子どもたちにとってアメリカという国がどこか遠い知らない海の向こうの国ではなく、また会いたい人がいる国になったことは親として喜ばしく思います。

お父さんとして、子どもたちに思うこと

ヒッポの環境で育ち、子どもを持つようになったお父さんとしていま何を思いますか？という質問をよく頂くようになりました。私がいつもお伝えしていることは3つあります。

1つ目は、世界にはいろいろな国・地域があり、自分もその世界の一員であることを知ってほしいです。学校での外国語教育は間違えないこと、試験でよい点数を取ることに焦点が当てられており、外国語に苦手意識を持つ人も多いのではないのでしょうか。子どもたちが学校の教科として外国語に触れる前に、多くの国の人に出会ってほしいと思います。勉強する段階になった時、英語と言えばアメリカのグランパとグランマが話す言葉、イタリア語はステラというように、その言葉を話す人たちの顔を思い浮かべることができれば、外国語学習はもっと楽しいものになるでしょう。また、世界のニュースもどこか知らない国で起きた自分と関係ない話ではなく、自分の知っている人が住んでいる国の出来事、自分事になるでしょう。



2 つ目は、小さな勇気を持ってほしいということです。私は言葉に興味を持ち海外へ一歩踏み出すことができたおかげで、多くの出会いに恵まれました。しかし、私と同じように海外に行ってほしいという意味ではありません。子どもたち一人ひとりやりたいことが見つかった時に、その新しい環境に飛び込む勇気を持って欲しいということです。最初は小さな一歩かもしれませんが、その一歩は誰もが予想だにしない未来に繋がっているかもしれません。自分の好きなことで伸び伸びと活躍してくれることを願っています。

3 つ目は、大好きな家族・友達を見つけてほしいです。私にはヒッポの活動を通じて知り合った家族同然のメンバーがたくさんいます。子どもたちも多国籍且つ幅広い層のメンバーと交流する中で、多様性を受け入れられる柔軟さと尊重できる心を養うことができれば、きっと国籍を問わず多くの人から愛される子になるでしょう。そして、私にとってのアメリカの家族や申さんのように大好きな家族や友人との出会いがあれば、自然とその国や言語に興味を持ち、その人達からきっと素敵な言葉のプレゼントをもらい、心豊かな幸せな人生を送ってくれるそう願っています。

